

中国パワーはどこに向かう？——見て、歩いて、感じたこと

2024年3月号に「中国はどこへ——9年ぶりの南京で考えた」、そして2024年8月号に「ラオスにいったい何があるというんですか？——ラオスみて歩き」を掲載していただきました。同じような報告になってしまうかも知れませんが、今回は今年4月に北京と西安を個人旅行で訪問しましたので、そこで感じたことを書かせていただきます。

トランプ大統領が「アメリカ・ファースト」を唱え、高関税政策や人権・国連憲章・国際法を無視した行動によって世界を混乱させています。日本でも都議会選挙で「都民ファースト」が議会第1党になるなど、自己中心的な「日本ファースト」が目立つようになってきたと感じます。「習近平の中国」でも、「中国ファースト」は徹底していると感じました。今回の中国旅行の動機は、昨年12月にビザが廃止されて入国しやすくなったこと、政治の中心・北京を歩くこと、そして西安で「兵馬俑」を観ることでしたが、見て、歩いて感じた「トップダウンとスピード感」についての“驚き”を5つあげてみます。

1 EV（電気自動車）の普及

北京は世界最悪の大気汚染都市とも言われていたのですが、「街が静か」。空気もきれいでした。それはEV（電気自動車）が多いのでエンジン音がしないし、排気ガスが出ないからです。バイクはすべて、路線バスの大部分、乗用車も北京では半分以上がEVでした。世界の生産台数を誇る中国のEVメーカー「BYD (Build Your Dream)」は来年日本向けにEV軽自動車を販売する予定です。関東鉄道はEVバスを11台保有していますが、すべて中国製です。中国では急速に電動化が進んでいます。

2 地下鉄の建設

北京ではこの20年で30本近く、西安ではこの5年で10本ほどの地下鉄が開通しました。南京でも2014年の5路線が2023年には13路線に増え、事業進行中が11路線あると報告しましたが、驚異的な建設スピードです。都市部への急激な人口集中が起きています。ちなみにベトナムのホーチミン市では20年以上かけて日本企業により地下鉄がやっと1本、昨年12月に開通しました。なお、北京の地下鉄に切符はありません。QRによる電子決済が主流で、タッチ式のクレジットカードでも乗車できます。

3 高速列車が縦横に走る

「交通強国 鉄道先行」のスローガンの元、国土を縦横に走る高速鉄道路線が急ピッチで整備されています。2000年代初頭、日本や欧米の技術をベースに開発され、事故を起こした列車をそのまま埋めてしまうというような事件もありましたが、今や日本の新幹線路線距離約3千キロに対して中国はこの20年で約5万キロにもなりました。すべて指定席で切符はなくIDカード（マイナンバーカードのようなもの、外国人はパスポート）を駅の入口でかざすだけで乗車できます。運行時間も正確でしたし、スムーズな走りでも乗り心地も新幹線にひけをとらないものでした。ちなみに、世界一正確で安全と言われてきた新幹線は、最近トラブル続きです。先日も東北新幹線の最新型

車両が走行中に停止して動けなくなったという事故がありました。中国は世界中の高速鉄道建設に乗り出すような勢いです。インドには高速鉄道がなく、日本の政府と企業がインド政府と組んで、建設計画を立てていますが、中国企業なら数年でつくってしまうことでしょう。

4 地方都市にも高層マンションが林立

大都市とその郊外はもちろん、地方都市でも高層マンションが林立しています。高速列車から眺めていたら、5分以上途切れることなく高層マンション群が続いていました。いったい誰が住んでいるのだろうか不可思議です。中国も都市型社会を目指しているのです、それを先取りした建設ラッシュだとも言われていますが、それにしても地方の農村地帯に高層マンションが林立するのは異様な光景です。

5 キャッシュレスと超管理社会

道ばたの露店でもスマホのQR決済です。現金を使う中国人は見かけませんでした。駅では空港並の持ち物検査が必須です。IDカードがないと列車には乗れませんし、博物館などの公共施設にも入れません。監視カメラと相まって、すべての行動が記録されています。北京で天安門を目指しましたが、5カ所以上のチェックポイントがあり、パスポートと手荷物をその都度点検され、あげくに、ビニールテープを没収されてしまいました。なぜ?と考えると腑に落ちました。ビラやポスターの掲示を防止するためなのでしょう。

なお、中国はとても安全な!? 社会です。監視カメラが至る所にあり、すべての行動が管理されているので、悪いことはできません(と言っても無差別殺傷事件が起きている)。

トップダウンとスピード感の「習近平の中国」

「上に政策あり、下に対策あり」とも言われる懐の深い中国社会ですが、中国共産党(習近平)が持つ巨大な中国パワーは、トップダウンとスピード感によってどこに向かうのでしょうか。「トランプのアメリカ」「プーチンのロシア」も同様です。さらに言えば、「トップダウンとスピード感」では茨城県知事大井川和彦氏も負けてはいません。危機にさらされている「人権、自由と民主主義、法の支配」ですが、中国の若者達には未来を感じました。

